

俳諧子、草  
晋子年考  
乾





其角堂永機編輯  
小築菴春湖校合

俳諧

み、な草

乾坤

晋子年考俳句解

東京 求古採新書房持



俳諧

を習お

つとを習おみ、な草、丁、つとを  
く、習おる、つと、何、く、習お  
る、つと、つと、  
先の習おる、草、を、子、を、の、つと、  
を、習おる、その、草、の、習お  
る、つと、み、な、草、を、習おる、



此書をけり集の趣ももろくぬるり  
先考のり遺稿ぬるしむるの  
かみかきしむるぬる我かき  
しむるし摘ハ望雲而思のこぬ  
とつものやぬるきしぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

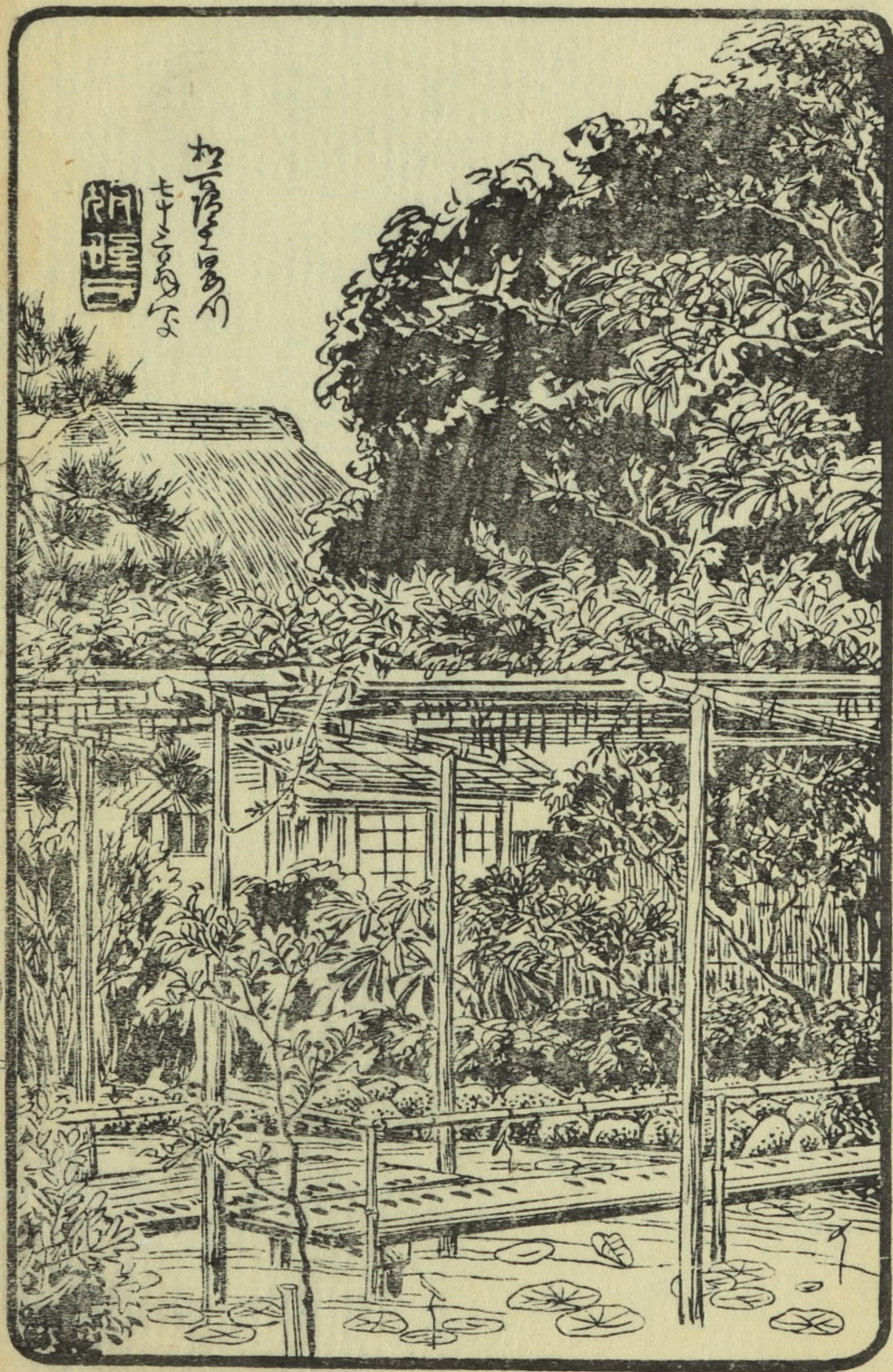
且ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

寶晋斎の歌

他  
の  
書

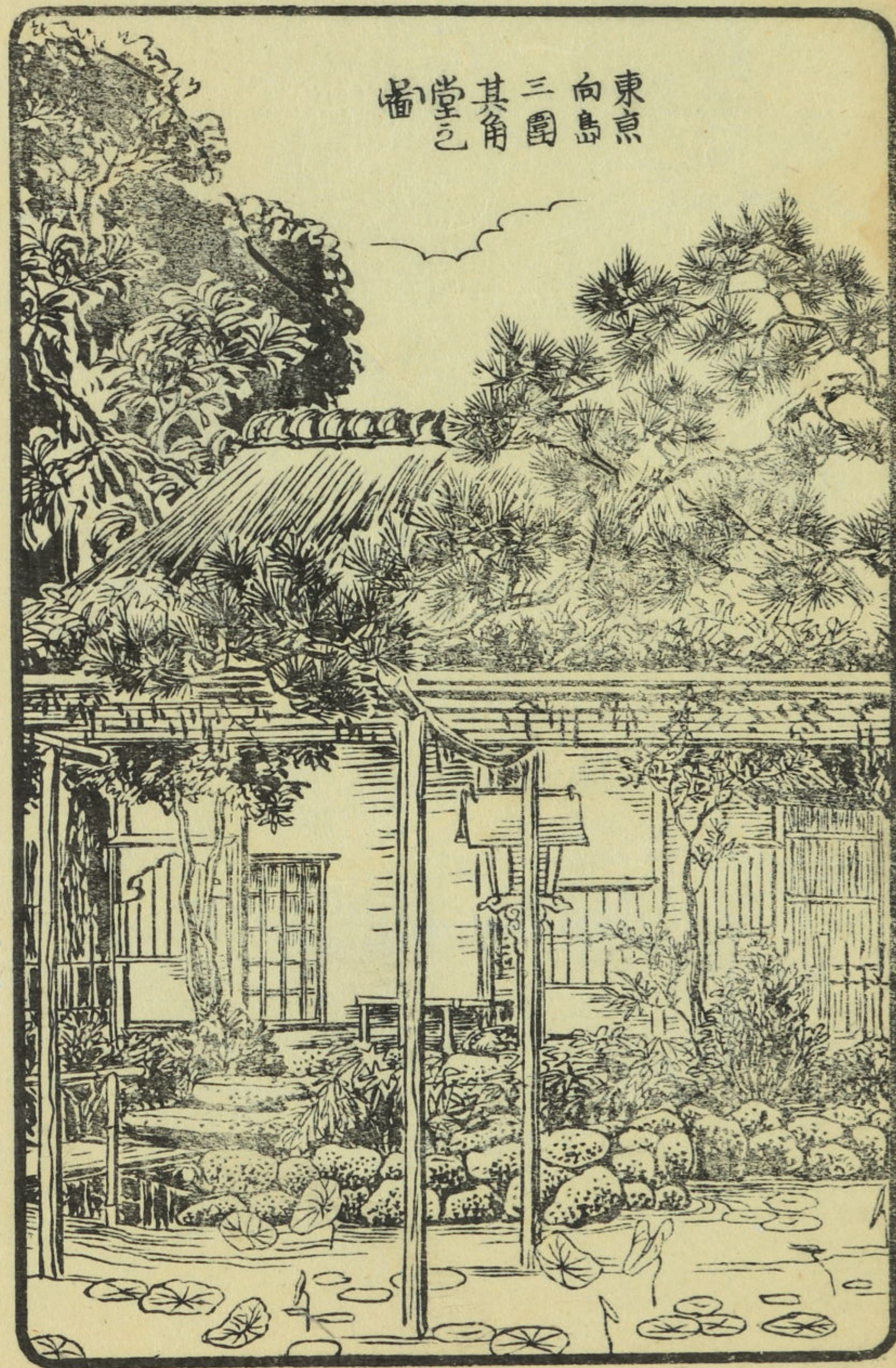




江戸  
 七十七  
 七十七  
 七十七

累心園遺稿

三



東京  
 向島  
 三園  
 其角  
 堂之  
 畫

城下遺稿

二



晋子  
六世  
螺窗  
居士  
肖像



男子像房永機編

俳諧

み、な草上

晋子年考

老蘇肝螺窗翁遺稿

其角堂永機編

小築菴春湖校

室晋初其角翁本姓竹也累代江別屋田の農者なり  
父八椽が東吹号晋子元和八十五歳誕焉後东筑堀江所に住  
りて下野守のより俸禄を得て医術もつて業を以  
て和歌連歌をよみたり亦俳諧も名有り田良正春の門下  
母六回別何某の女として椽代也吹去十のち、官を辭して  
より十とせしめり礼を以て吹去三子あり長男也晋子翁也



寛文元身也七月十七日堀江所へ出て出生知名八十八亦平助  
初平を五平と言しひく或信濃の住す今も八平  
その後他へ縁を

文政の時の成りあつた知名源即又平助とむらう  
いふぬかや

晋子誕生の枕母の夢あり

人目よるもつとくしり子の寝る所の室さしり

加のしちの曉も想

住吉の招を我れ吹くく声くく海。沖津の波

寛文九己酉年晋子九歳 九月廿日 東吹の雲夢みに

言の夢をせよはのしちをていひやうんちん

晋子誕生の夢あり

馬のうらいたをせん也のしちをていひやうんちん

是寛文元年の誕生あり也

同十歳成十歳東武三田大圓寺へ入學同十歳女同十二歳  
九月芭蕉翁よりして東武三田へ入學堀江所名主小沢  
太右衛門止宿同十三歳九月改元延宝元とぬる晋子十歳  
しり寄宿三年同二甲寅十歳本草綱目を写しと子社の  
如公羽の門へ入て螺舎麒麟角とよむ初夢子り白り  
鹿雁虫とぬるしとあり皆しり暮



是を修し一家の俳諧なるは同三卯十五歳内經  
素中易經素中を寫又蒲生高孝郎寄し何勢もの  
の書の書字何り同卯丙辰十六歳本國草薙三越り  
講送しある匠の石を以てせよ儒ハ服部寛高を以て  
學いし年講述何り書ハ依木文山のつを後一家の修  
何り画ハ英一傑よる

何り書ハ画名暮子と云ふをわさる草庵日記ハけり  
この書ハ白兄才兼を兼わら暮子といふ名アリ晋子の門下して  
画をよす勢勢松坂也并氏一画松梅の画漢ハ晋子暮子  
双書トアリ

孫倉大巖和尚の詩を學びて今年易傳受何り

唱晋其角 易經上神下 晋上九 晋其角トヨリ

同五丁二十七歳 権青ハ歌仙同の同六戊午十八歳 松合  
松合五丁句合化是田舎句合なり 同七己未 秋洪水 同  
八庚申十九歳 次韵那潜何り 是を信徳ハ七百五十韻  
對 三百五十員也

西集の年号ハ九歌仙延室ハ次韵ハ延室九と云ふは  
傳り成り

同九年同廿一歳 九月改元 天和元と云ふ 同二壬戌 芝  
金地院前ハ居を移し 同三癸亥 三年河原の吟  
鶴ハ何り 秋洲生ハ何り



嵐雪藤句の三物有り 五月三日 粟成是音子公羽  
編集三十余部の書数ナリ

此のしやせき 括弧の二行 粟

同字終り 新三音韻成 同卯甲子九四歳 二月戌元  
貞享元戌 二月十日 上京数日

西川の死出政を旅のちしめし

東海道より美濃路へ又伊勢へお宿ししる 五月庚  
子をともり 宇治へまほしき息をこし 嘉集成  
とて 五月住吉より西醫へ多敷俳諧行 後先し

驥の安し二万句の欄 何れもさし

秋の未帰杖

京のあまの目

片腕ハミヤコリ 残すお祭るな

貞享二五九歳と年病災何れハ医療のしめし  
菴敷わらして 晋子を深川へ住し 本居宗室

杜雷堂

雷柱子よよよハ一間の巻く なき穴を回し 出山の

釈世を安置し ちと雷破笠下居て 同し 室翁懐古の

画巻と世の巻くし ちと俳諧の外ハ翁をこし ちと

壮年の巻くし ちと ちと ちと ちと ちと ちと

丙寅元六歳 三月 性舎成 意生 仙化輯



虫 遺 和

五月三日 相州より、本誓の温泉へ赴き、文麟の  
旅舎を宿ふ 文麟ハ新田藩  
梅津千代守

三吟三曲の音と、本誓の苗をうづる。寺のつ

三吟三曲の音と、本誓の苗をうづる。寺のつ  
相州をゆき、藤つら、杖を賣、江の島に所懐我ら  
病を思ふ、指圓を尋ふといふ。大巖和尚の言牌を  
大巖和尚 和名 幻呼

香一炉をもち、に錢を包み、

と、舟に乗り、しし、江の島へ、尾階熱田より、和尚  
いとの向を音子より、船を。秋の果、本誓江、新山家集

咸同誰より、二百員、咸同四丁、廿七歳、四月八日、柳勢、尾

車、國幸七、晋子、母也、東武芝、三平、板上行、寺、森

秋の果、衣を、き、卵、力、心

同、霜、月、央、續、三、所、東、武、の、院、も、金地院、前、に

信と、草、庵、の、吹

江の、雪、梅、花、の、心、を、思、ふ、心、

同、五、月、廿、八、日、八、歳、母、の、一、周、忌、累、て、七、日、の、果、上、京

秋の、果、元、禄、元、と、咸、洛、の、季、吟、真、子、を、互、て、講、歌、書、

秋の、果、元、禄、元、と、咸、洛、の、季、吟、真、子、を、互、て、講、歌、書、

秋の、果、元、禄、元、と、咸、洛、の、季、吟、真、子、を、互、て、講、歌、書、

虫 遺 和



内廷宮の良材を拜する

大工造の久しと教門津の秋

十月差城のりやうせうせいしん。三井伏見の文の記

終りのりやうせいしん。宗隆尼年 歳八十四 於澤田葬

東宮師也

子部まぐし暮る酒

等々遠くさう常下 沢田の霜

霜月七ちりしこ尚白亭三吟 浩あし越年

まじり

意をまをさむらふかきし  
かきの線は同じりやう

行幸り牛造らぐらとりの巻

かき〜二二

かき〜二二

回皇のちん〜ちん西山のつ

白見のちんちん西山のつ  
このちんの興國のちんちん  
山神の美皇のちんちん  
ちんちん西山のつ  
文通のちんちん西山のつ

回皇のちんちん西山のつ

吟の巻として啼く

回〜年のか金地院前より足部向所へ居る



狂而堂六藏卷の早しうし新居の白り

菊の白りしおしんわん(電)

と子まのあしうし菊八奥羽り柳り(音子まのあしうし)

元祿三年午三十歳入歳且

弟の所りし居るしあて

り(今)の採りしをさ(信)ん(作)

り(昔)の採りしを(慈母)也神の(あ)一夏百回を撰て

花摘と題し二君七日成(回)年五月三(不)ある

ものを信(濃)承(を)ま(り)し

梁の欄を(送)し(馬)の上

かなし十日の(あ)のもの(貞)を(と)り(ま)る(は)と(し)

三藏(り)ら(る)か(あ)の(も)お(は)せ(る)も(と)り(ま)る(は)と(し) 採りし(は)梁の(あ)し(を)採りし(は) 梁の(あ)し(を)採りし(は) 梁の(あ)し(を)採りし(は) 梁の(あ)し(を)採りし(は)

阿(の)の(非)人(貴)し(麻)蓬

六月翁(在)真(の)の(文)通(り)同(四)年(未)三十一(集)雅(談)

集(二)を(成)中(れ)大(山)樓(造)は(り)

品(何)下(連)つ(め)つ(ら)し(一)の(巻)

け(吟)を(と)り(あ)し(り)十(百)家(略)同(五)年(申)り(あ)る

同(六)癸(酉)三(十)三(歳)六(月)九(日)葉(白)雲(と)り(あ)る



同船して牛島へ船運すげ此の早敷く田園こそして農家の  
おけさとなす雨こそよん

おけさとなす雨こそよん

感激す

雨乞の肉切ハと粒三圓の赤庫存す

雨乞の肉切ハと粒三圓の赤庫存す  
雨乞の肉切ハと粒三圓の赤庫存す

雨乞の肉切ハと粒三圓の赤庫存す  
雨乞の肉切ハと粒三圓の赤庫存す

秋の湯治見ゆ

秋の湯治見ゆ  
一滴の露を清く

空や紅梅を

空や紅梅を

空や紅梅を

空や紅梅を

空や紅梅を



とるもの世

信濃のふらう子をけりくあり存

と書し

病麻をくわりのくま

子と娘とふあつてそんまの

呪

七十有餘の老送らう何の薬をらうのまじやと様美。  
もくむる所をよおす

死病をくま草のあり験の

つらう七十二を限り八月十八日の晩寝 月九

二か樓葬上行寺

と書

癸酉八月十八日昼亡父葬送の場より  
崩心の悲涙懐きて四生の記をよめる

お吟

晋子

一 海子野とほのなる 暇うな

けりあ母の片袖の 二 霞

世の結節のくくつやちるらん

海にまゝしるるさめ乃酒

残金と只のぬ気さう濁らる

孔者の語はくくる雪汁

唯後毒を  
臣一引  
けりあを  
けりあを  
いふや  
また



紫神のまじりたるはゆき詰り  
 大なるもの畑畑のまじり  
 奇世の櫻の木の立の雑司谷  
 茶碗のよるは清のなま  
 山家ては遊行の師をなげり  
 今産の神ひしは後の子  
 壁の声 流まき古戰場  
 石地まの雪をぬる  
 草種まの谷の  
 點の向を此井園しこ置

日ほりある。水裏のらん入  
 高のなげりや。水家の編笠  
 七つ年。振枝をくま。云を  
 仕切りの虫我をくま。川  
 花の存る日ま。川  
 海苔を力ま。春の  
 目く死耳く死く。死の  
 玉取まの似補をあり  
 此鏡けりののこし。思  
 世をこま。邪人の勝



立止して傍房まよ中より小室垣  
河より追ひこし井へある鶯  
物まよきよのお所乃男まれ  
あまこころは民平仲り教  
あつさうとやする各ハぬきあ  
四夜この仕着せぬてやまを  
鄙人を鬻てぬていふまを  
齊のくくあまみくすれ解  
風呂簾しりりましし月を待  
紋のつぎぬいつこの 秋

草ウの根ふちちさた地のをせけし  
殺生石のりあるむあ  
あまの園とくくく草むし  
旅麻あまのぬまぬを買  
あまのくまの人の白の上  
つこも僧都の足すまの濱  
れけけと鯨のすまのぬき  
牛のほろけくく又存  
あまの二所程程の菫の色  
あまの着せぬ解つまの白



此所二句持り成りて附の意ありし句凡そ縁續段に  
てしやと云ふはらうの十中句は其の切二句を秘蔵す  
まはるる也興し一會せしむ茲に其書の二句を  
吟詠二百五十年のてしやと云ふ句は満  
徳孤あはるる所く言つる也

酒のまゝ雨のぬき肌切らるる

伯ととらり秋行先り旅

佛檀を所化りたまむの時

二牛一棧うけむ入あり

はしはしはの道えの老の初見困友のこころの  
衰態のありし物やうたへてしやと云ふ句は  
あるは日五十年のてしやと云ふ句は満  
徳孤あはるる所く言つる也

十月の秋のあやめは甲戌三十四一周いぬ果て九月六日  
上原茂足 甲戌は乃河 東海道をゆく掛川より  
社章又雲石川より天龍へける京谷よりしやと云ふ句は  
御師福井茂兵衛ちまへ止宿正の影懸宮河のり  
田九秋をいれしや三輪を原存南都をいれしや  
多武峰を日二月堂に九をいれしや

とら

白くしやうと重く煙る谷をうかんし山嶽の歌  
はしはしちのきしや西の床をいれしや  
院のうたのきしや心のほろこら寒を結







秋田遺稿

去るくまふくも入活くさく越年於京白兄等三巻  
因回八七五歳入去来う歌よとまう枯屋巻二巻  
翁迎馬記 格たり成二巻のそめ内内及浪戸四巻

叶帝四國八口らぬのよの言はくは  
さしこ白く歌はくは八巻のそめ

同子をの白く

因成り二巻到く京り視

十月帰京都

熱田浮ぶ浦よふきこくそ我の眺を

宵の眺を眺下るんおのほ 晋子

子なるの羽りのる 砂原 珍白

滅絶のそり大根を打りけし 露川

冷酒のそは格勢のす 湘水

奉公のこちまは海へ二枚を 虎次

まじりあは、ふか力、瘤 梅人

村に、鮎状おくをるこ 素

西よ、あは、けらの出るを 野幽

十九の年の吹雪

去途狂倡吟

狎子着しほの所、何く大井川

秋田遺稿



虫歯  
種

回年 併諸片除を好す 草庵に付集す

おの白ハ立木の如し

胸ハ松の如し

石三六地の如し

表ハ竹の如し

階田を此の如し

之好しを好

晋子入るる

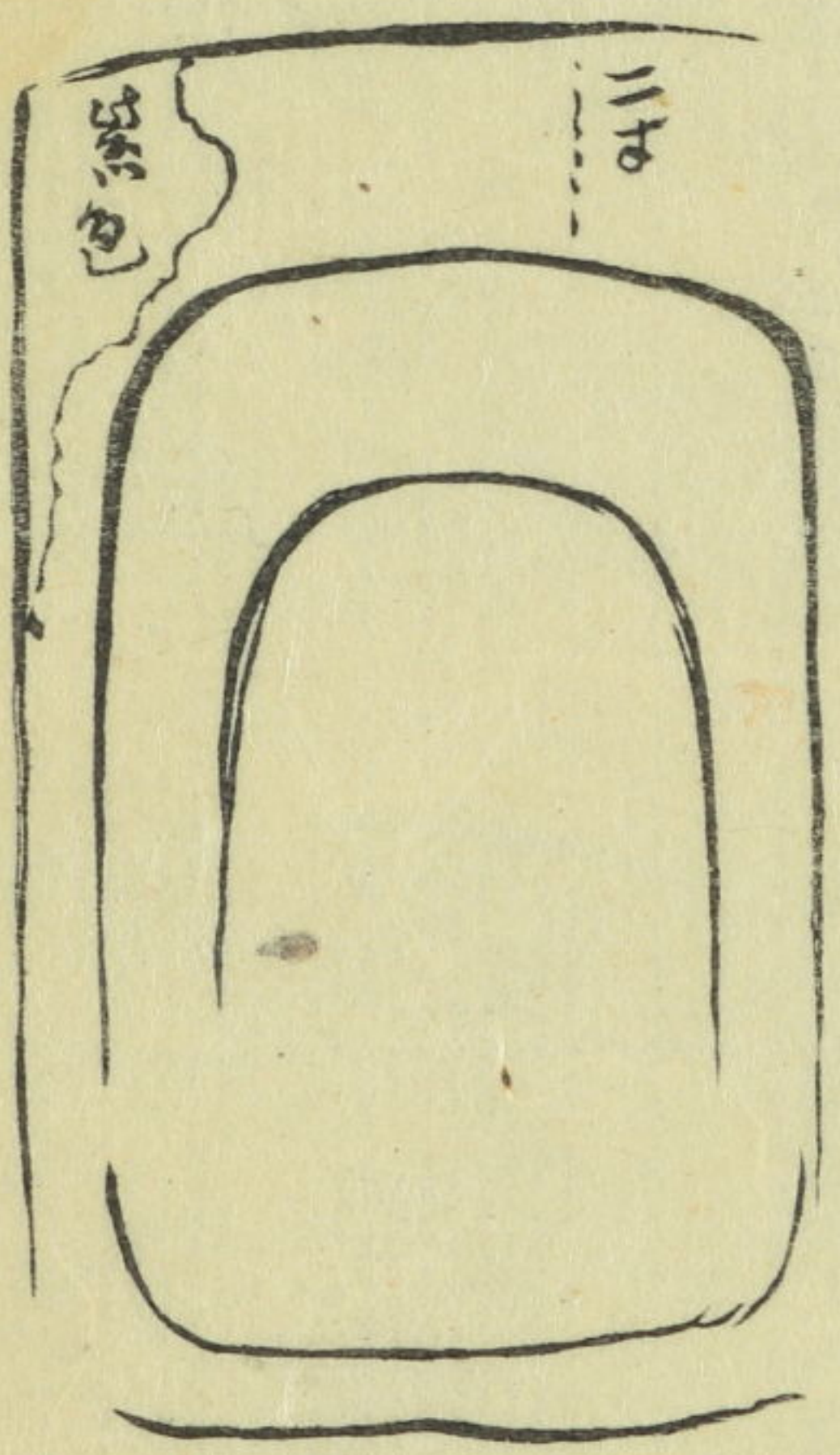
築く九西子三十六葉 歳且

積むるの實を此の如し 今乃の如し

是二と云紙一物廣の如し 且月夜を葉を成り川人  
お吟の如仙十是也 回年三弄子より 永元章の  
硯を好し 室井晋子より 今乃の如し 伏云龍の  
歌をももる 月雪の如雪の如し

龍尾石

出  
中  
厚  
下



画工  
抱二所藏

田舎  
高



裏面

寶

文字大キサの畵

晉

是より号宝晋祚

瑞

元禄九丙子十月深川長慶存一翁の墓を移す

時年一〇〇〇舟政を暮る

專吟沾徳境より四吃の雲仙何り 同十丁五三十七歳

四り娘をまゝ各さらしよ

祝産育

とやのたの皮の膝の緒つらら

とら若菜ニ思て撰て綿繡段段 能の央上貞

げり浪花の旅舎つかりと翁の何のものを

書写何りとも暮庵つけふ十二月帰京れ何り

寅三十八歳六日九日直港つて居を移す芝田甲

五丁目海側の住居し有竹居文合庵の号あり

とらち

竹三竿をくくあつげしつらら

をいあらしつらら

竹の翠さらさらと寝る時何り

涼蕙ひゆく脚をしし



泊〜〜。家の涼〜と

か〜〜

ぬほぬほ〜〜

同年十二月十日草庵祝部の家へあそび 貞享甲子  
 のまじ上直〜〜日記〜〜とて年々〜〜  
 袋〜〜のけ籠〜〜と破〜〜皮着〜〜何〜〜  
 池魚の災〜〜あ〜〜一籠た〜〜  
 浮〜〜〜〜遊部〜〜居を移〜〜あ〜〜古本日記〜  
 ち〜〜〜〜の地〜〜や 何〜〜四谷區〜〜住〜〜  
 同十二日卯三十九歳

〜〜

中野の次郎部の家を訪〜〜移〜〜玉子状野人〜

雪のむ水十とよむ  
〜〜遠方た〜〜社〜

〜〜の比の〜〜同十三日辰四十歳萱坊甲子  
 藥師堂の南〜〜草庵割立習〜〜終〜〜早〜善哉庵  
 梅〜〜隣〜〜萩生惣右衛門  
 七子翁七周也暮の七あ仙成 三上吟と歌すけの仙  
 色は八景と比す  
 七〜〜と〜〜あ〜〜ひ〜〜  
 同亦幸三十一歳二月 焦尾琴三三同又同五年甲子二  
 十二月十四日都文少卿とて俳諧一坐



都文公より八土屋彦三平石を以て在座回向院裏  
吉良のときよりや 嵐雪のゆへ晋子ししは後海家吉良の屋敷  
 赤穂の浪士押も古主の遺恨を果さんとす云云  
 葉月して大言源吉ひしを述は子葉ぬは其意  
 幸室より生涯の各海對面しての別よとて  
 ちよハ詠る吉良家(志)の入るべき  
 我雪のちよハ師一坐立り上  
 月雪のちよハ命の控とて  
 毎月廿二日忠羽文鱗への文通せり海帯とて一回十六  
 末四十三の末女子をまゝる名みり

女子をまゝるの向い

終りし卯吸の暇をまゝる  
 四年二月十四江戸大地震  
ちよ 辰國流火とて  
 妹のちよ薑とてけし解の器  
 宝永元甲申四月三日及元とて名敷榊子とて終るナル  
 丁亥の世のちよを思ふ人の上本とて 同二回甲午歳  
 夏の如く心細しして草履のちよとて 同年より  
 病より三年 福甲別業を好しして  
 杉木の串海嵐とてちよの友







東山遺稿

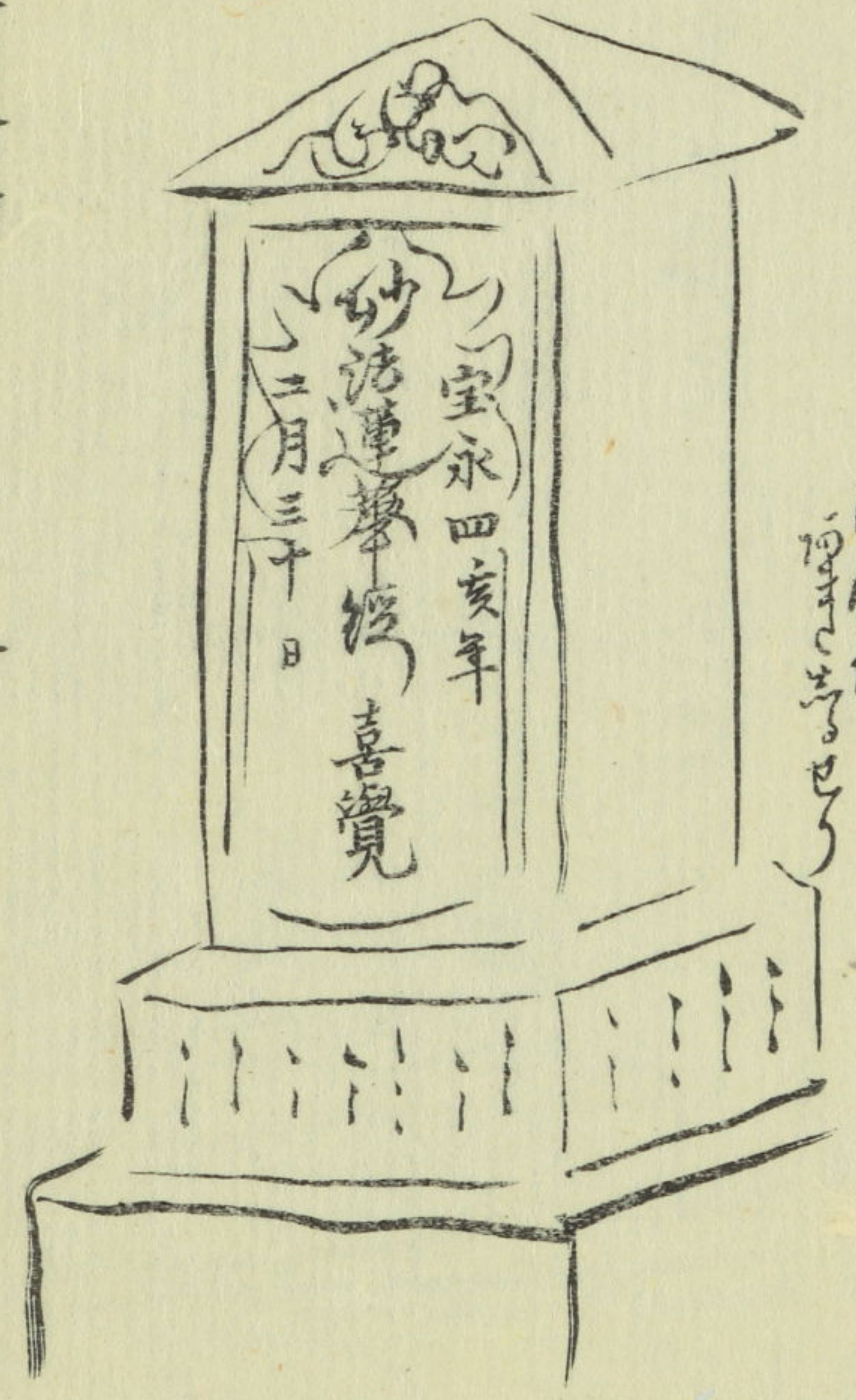
嗚呼生者の口を食く我死ハ志極神を酒の  
むるあかしの回をのこすいふ思儀なるぬその時  
阿る誠く知死期の大禱機とゆりぬまき三月二  
亡骸ハ二巾履上行きぬ細の東山居士の墓をみよ

今東都小田原町に宝井吉五郎とあり。高家なり  
是晋子の血脉也

西居士の墓場のゆゑ  
墓あり宝井と号す  
喜泉の井あり

墓石再建ハ丑十年忌の折堀屋の寄附

此の所の所名  
西居士の墓



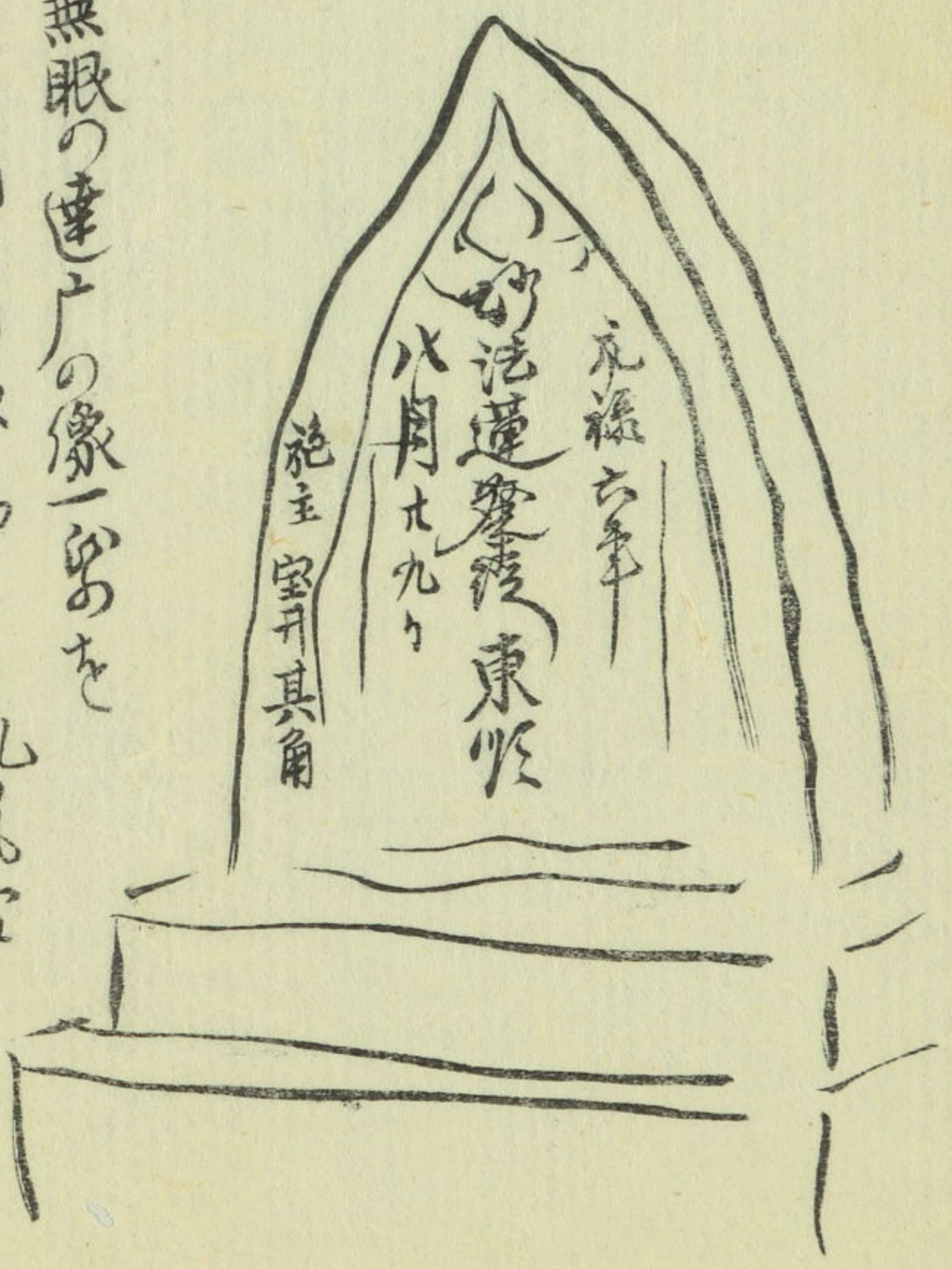
墓所全圖ハ江戸名所番付あり

東山遺稿

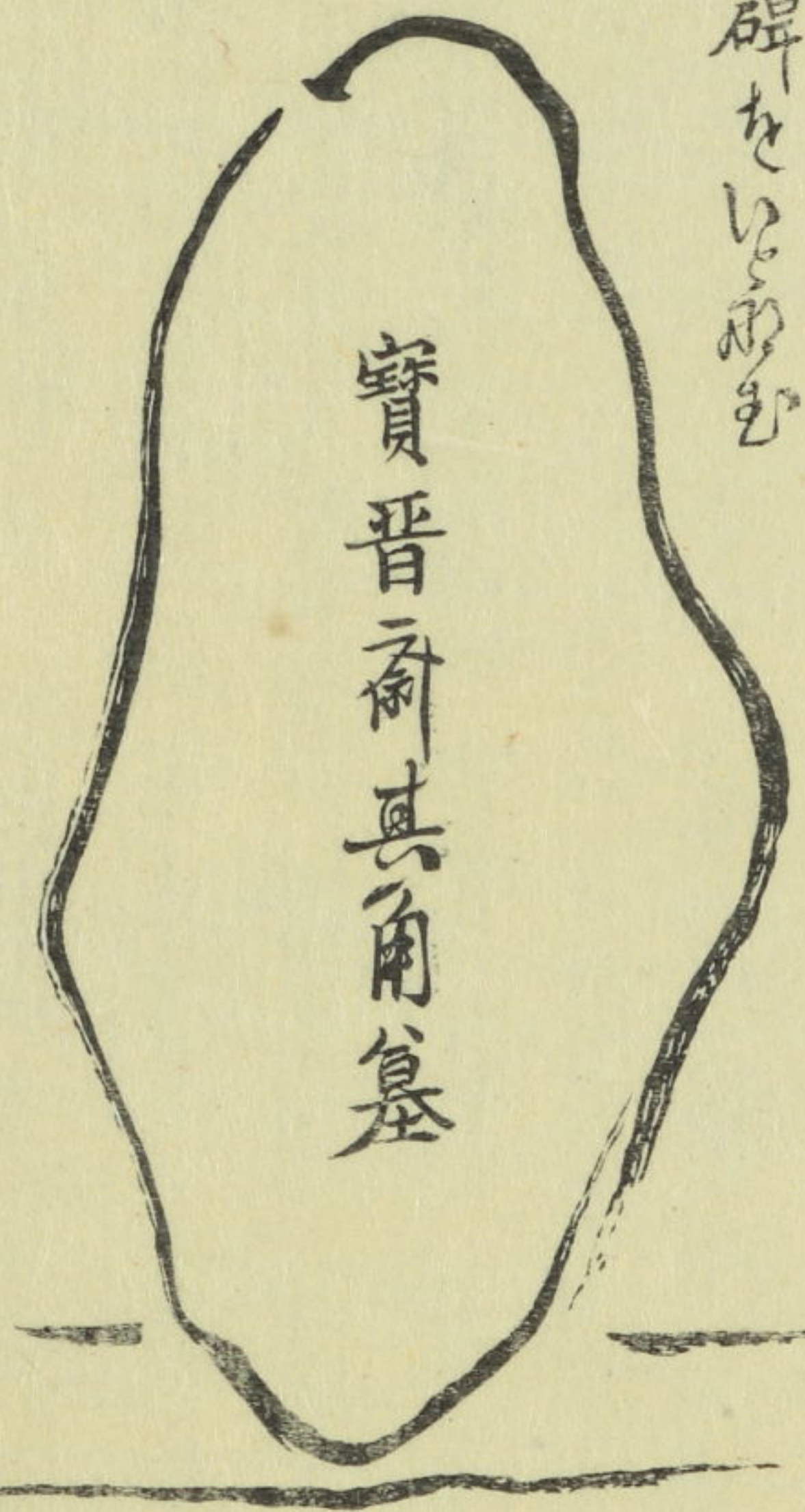


出石遺稿

吾子病中、無眠の達旦の像一室を  
書けり、廓然不動の固縁、如く清流嵐雪  
根風、法阿をたてし、知友の人の、おきて深川を夢守



芭蕉翁の塚に隣し、ひつり土慢頭を築き、此佳城の下、  
初く墓碑をいひぬ



裏面

宝永四年二月二十日 知友の人達 伏文山書

彼影相子も風りし、おまの境、秋の氣を感し、九句めた

黒川遺稿



竜溪禪師九多の氷雜の必まのりぬの 氷伴の  
尺の一向を今昔のののりぬのりぬのりぬの  
その昔東古のみしらようふ量下佛母準提尊を  
授よとてぬし其爾堂より号置とてぬのりぬのりぬの  
産屋強ゆるる準提靈驗記のぬのりぬのりぬの  
今教曆を彈し草堂の地佛とてぬのりぬのりぬの  
可却の佛果とてぬのりぬのりぬのりぬのりぬの

終焉の歌仙つりり九句ましやぬぬを今茲  
先考螺窗居士也善のつりり居士附向り

逸事を採りてとてし晋翁の吟の綴りて  
一思とてとてし晋翁居士とて九一五十年の  
信りぬのりぬのりぬのりぬのりぬのりぬの  
韻の韻語とてぬのりぬのりぬのりぬのりぬの  
心とてぬのりぬのりぬのりぬのりぬのりぬの

七世孫 晋永概







和歌集

あふととてお氣さあうし一花盛  
扇の芝乃画をすこも草  
罌の雛子一卵くまへ旅あり

集

河竹の情を水より忍びらさ  
揚枝をゆしし持たすお

集

くまの椽よむらぬうる涼さよ  
旅つらき宿の魚さ

集

孝行を茲鳥夜啼よけむか  
勝りしとく伊集の琴

集

魚 魚 魚 魚 魚 魚 魚 魚

武軍部のおもひを伝ふつと

集

萱うねりしこかく碇総  
舟のゆき巻の面をいふ

集

白足もんの何れぬむらさきの秋  
あ霜よ民の甲舎の角田川

集

花つと子の白とりに母のよら橋  
鳥帽子さし三石強直の種を

集

花の孩さるるけこる突上のや  
花の孩さるるけこる突上のや  
汗すまふるのまのまの日

魚 魚 魚 魚 魚 魚 魚 魚 魚 魚



虫書遺稿

晋子居の編輯目録

甲舎句舎 系一栗 蠹集 新山家

瀆の栗 花つこ 以を昔 雅流集

萩の海 栞尾花 句兄才 若原合

裏の糸 錦繡後 三上吟 焦尾書

ふらふら 新二百次 新音次

亦 又蓬葉 綴系 皮箆摺 夢破三百頁

没存摺り 類梅子 丑元集 瀆丑元集

潜俳 升の字字上紙



